

氏 名	矢 崎 千 華
学 位 の 専 攻 分 野 の 名 称	博 士（社会学）
学 位 記 番 号	甲社第66号（文部科学省への報告番号甲第654号）
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
学位授与年月日	2018年2月16日
学 位 論 文 題 目	「身の上」の歴史社会学 ——明治時代における自己物語記述様式の成立過程から——
論文審査委員	（主査） 教 授 佐 藤 哲 彦 （副査） 教 授 宮 原 浩二郎 教 授 三 浦 耕吉郎 蘭 由岐子（追手門学院大学社会学部教授） 野 口 裕 二（東京学芸大学教育学部教授）

## 論文内容の要旨

矢崎千華氏による学位申請論文「「身の上」の歴史社会学——明治時代における自己物語記述様式の成立過程から——」は、明治時代における自己物語の記述様式の分析から、日本における近代化について、これまで看過されてきた局面を、独自の視点から歴史社会的に論じた研究である。具体的には、自己物語記述様式の成立と変容の過程を資料に基づき分析的に明らかにすること、および、その成立と変容する過程の社会学的含意について考察すること、からなっている。七つの章から構成される本論文の概要は、以下のとおりである。

序章「「身の上」の歴史社会学と自己物語記述様式」では、本論文の問題関心および目的とねらいについて論じられている。近年、ライフヒストリー研究やライフストーリー研究への関心が高まっているが、ここでは人びとの「物語」を分析するためには、それらがどのようにして語られるようになったのかという、その歴史性を明らかにすることから始める必要があるというそもそもの問題関心について述べられている。そして、その歴史性を明らかにするために、「ことば」が大きく変容したときである明治時代の、とくにマス・メディア上のテキストに現れた〈自己物語のようなもの〉と〈自己物語〉の記述様式を分析対象ととしている。そしてこのふたつは「非連続的発達」(A. Giddens)を示す一例として捉えられるとする。また、従来の近代化論では「近代化」をそれまでとは異なる事物や制度の導入の観点（論文中「上からの近代化」とされる）から記述してきたのに対して、本論文は、人びとの言語実践から「近代化」を記述するもの（同「下からの近代化」とされる）であることが述べられている。その上で、人びとの「物語」に注目する理由について、「物語」には「共同性」の生成と可視化という社会的機能が付帯している点を指摘している。

第1章「自己物語記述様式の成立を支える諸状況」では、資料と分析に文脈を与えるために、自己物語の記述に欠くことのできない「ことば」が形作られていく過程について論じられている。そこでまずは、教育・活字・出版に関する統計資料が中心に検討されている。その結果、明治30年代頃人びとが急速に文字文化に馴化していったことが明らかとなっている。これは、文字を「読む」・「書く」両行為の変化として捉

えられており、この頃「国語」という発想が生まれることになった過程についても明らかにされている。次に、明治時代初期から中期にかけては、いまだ、ばらばらの話しことばが用いられ、話しことばと書きことばの乖離があるなど「ことば」の混乱が見られたものの、その後、言文一致体の浸透によって統一の方向に向かっていったことが論じられている。ただしこの統一は、政府による政策よりも人びとの実践の方が先んじていた点などが資料に基づき発見されている。さらに、上記の資料に加えて、文学作品なども参照しながら、新しい書きことば（言文一致体）は、「物語」の主体の成立を可能にするものであった点を見出している。

**第2章「ことば」を分析する方法**では、自己物語を含むテキストを分析するための方法論について、ディスコース分析・ストーリーの社会学・構造的ナラティブ分析それぞれの利点と不足する点を検討することを通じて、テキストの言語編成を分析する視点が提示されている。本論文が着目する言語編成とは、内容、語彙、様式、構造とこれらのセットの動きを含むものであり、著者独自の方法的概念である。そこで本論文では、それぞれの方法の利点と不足する局面を勘案しながら、語りの機能を論じるディスコース分析的な考察の射程を取りつつ、テキストの読者もそれを構成する重要な存在として捉えるストーリーの社会学の視点を取り入れ、さらにテキストの構造を中心的に分析する構造的ナラティブ分析を組み合わせるという独自の方法論的視座に基づいてテキストの分析を行うことが示されている。また、同時に物語論の系譜を検討しながら、本論文で重要な概念である「物語」の定義についても検討し、その上でここでいう「物語」とは「現実あるいは架空の出来事や事態を時間的順序および因果関係によって叙述したもの」（井上俊）という定義によることを提示している。

**第3章「身の上」の成立**では、明治19年から大正初期までの紙誌上の「身の上相談」を分析し、従来誰にでもあるものとして捉えられていた「身の上」というものが、ある時期から記述可能になったという歴史性を持つものであることが明らかにされている。資料を分析・考察していく中で、現在「身の上相談」として理解されているものの起源は、『女学雑誌』『いへのとも』に見出されることを発見している。この章では、テキストがとくに「物語」（井上俊、浅野智彦）と「動機の語彙」（C.W. Mills）の観点から分析されている。そしてその結果、「身の上相談」の言語編成は、〈情報的な語り〉〈規範的な語り〉〈物語的な語り〉に分析的に類型化できるとされている。〈情報的な語り〉は情報を検索するような語りであり、〈規範的な語り〉は道徳や規範の観点からなされる語り（すなわち〈自己物語のようなもの〉）であり、〈物語的な語り〉は出来事の時間的配列と因果関係によってなされる語り（〈自己物語〉）である。〈物語的な語り〉は、その後書かれることになる自己物語記述様式（本論文では第4章と第5章でとくに展開されている議論）の基礎となるものである点も指摘されている。論述中では「経験」というものは、物語化して語ることによって理解可能になり、規範的にも正当化されうる形になるということを経験として踏まえ、「身の上」を記述することは、そのような社会的な認知可能性と規範的正当性を共同で探りつつ確定していく作業として捉えられるとしている。そして、そのように「身の上」を「物語」という様式で記述することによって、認知可能性と規範的正当性を通して「社会」を可視化していると論じている。

**第4章「自己物語と「共同性」の生成**では、前章の〈物語的な語り〉が定式化されたと考えられるのと同時期の明治34年頃の誌上（『ホトトギス』）の日記を分析し、そこに現れる自己物語の言語編成が〈単一構造的な語り〉と〈多層構造的な語り〉に類型化できることが明らかにされている。まずは通常の日記研究をレビューした上で、この時期に突然庶民が個人的な日記を書き始めたとする既存の研究を踏まえながら、日記が個人的な営みであると同時に社会的な水準で特定の機能を果たしているという仮説を呈示する。そしてそれらの日記の言語編成を分析し、〈単一構造的な語り〉は、書き手自身のひとつの「物語」からなる語り

であり、〈多層構造的な語り〉は、書き手自身の「物語」の中に他者の「物語」が挿入された（挿入された構造部分を「挿話」という）語りであるとしている。ここでは、資料とするテキストが、物語論における「物語性」（Prince）と自己論における「物語」のパターン（Gergen and Gergen）の観点から分析されているが、その結果、とくに〈多層構造的な語り〉においては、（書き手）自身の自己物語の中に他者の自己物語が入れ子状になっており、このことは、自身だけでなく他者についてもそれを「物語」として理解していることを示している。これにより「物語」という記述様式におけるある種の接続の実践とそれに伴って生じる情緒的な繋がりによって、自身と他者とが同じ「社会」を生きる存在として、人びとの間にある種の「共同性」を生成させているという仮説を呈示している。

**第5章「女性と「不幸の共同体」**では、時代的には第4章に続く、明治40年頃の誌上（『家庭之友』『婦人世界』）の「不幸」について記述された投書を分析し、それらの言語編成が〈不幸を並列化する語り〉と〈不幸を序列化する語り〉に分析的に類型化されている。ここでいう〈不幸を並列化する語り〉とは、自身と他者の「不幸」を並列化する語りであり、一方〈不幸を序列化する語り〉とは、自身と他者の「不幸」を比較して何らかの基準により序列化する語りである。ここではテキストを民衆史の視点から読み解き、構造的ナラティブ分析を中心的に用いた分析が行われている。それらの投書は、そもそもは他者からの応答を前提として書かれているわけではないが、投書が投書と呼ぶ形で投書同士が繋がっていく現象が確認されており、ここではそれを「接続」と呼んでいる。そして、当初の自己物語は他者の自己物語と「接続」することによって、その語りの内容が変容することが見られる（たとえば「不幸」から「幸福」への転換）。このことは、自己物語というものが固定的なものではなく変容可能なものであり、しかも共同作業によってそれが可能になっていることを示している。また同時にそこではある種の制度や規範が接続可能性の資源として働いていることも見出されている。このような「接続」という現象により、「不幸」という「自己物語」が、「不幸の共同体」という共同的な実践の一部として捉えられることが指摘されている。

**終章「自己物語記述様式の成立と「共同性」**では、「ことば」を用いた「物語」という記述様式が「共同性」との関係において重要な役割を担っていることが論じられている。まず、分析したテキストの言語編成の類型を年代順に追っていくと以下のように変容していったことが指摘されている。第1の段階は、明治19年の〈情動的な語り〉〈規範的な語り〉〈物語的な語り〉の混在状況であり、ここでは「物語」という記述様式の「発明」がなされている。次の第2の段階は、明治30年代の〈物語的な語り〉が定式化し、さらにその言語編成が〈単一構造的な語り〉に加えて〈多層構造的な語り〉も見られる状況であり、これは、「物語」という記述様式の「使用」実践を示すものとされている。最後の第3の段階は、明治40年代の〈物語的な語り〉を基本的な言語編成とした上で〈不幸を並列化する語り〉〈不幸を序列化する語り〉が見られる段階である。これは「物語」という記述様式がどのように「維持」されているのかを示すものであるとされている。以上の展開から、〈自己物語のようなもの〉から〈自己物語〉が生み出され、人びとの間にその記述様式が流通していった点が指摘されている。そして、第1章での議論も含めて、それが加速度的に浸透していく時期が明治30年代であることを見出している。さらに、語りの水準とその語りにおいて用いられる資源からも各段階を検討している。第1の段階は、〈規範的な語り〉に代表されるように社会的な水準からなされるものであり、規範や道徳が語りに用いられる資源となっているとされる。第2の段階は、個々人の水準からなされるものであり、個々人の生活の記述自体が語りに用いられる資源となっているとされる。第3の段階は、再び社会的な水準からなされるものであり、共有可能な経験が語りに用いられる資源となっているとされる。ただしこの過程のなかで第3の段階は、第2の段階で析出された「物語」の個別性自体は保持されているため、第1の段階と水準は同様に社会的な水準であるものの、それとは異なる「共同性」（私たち）を生成するもの

であると論じられている。そこで、第1の段階における「共同性」を「私たち」(I)として、第3の段階における「共同性」を「私たち」(II)とし、以下のような考察がなされている。まず初めに注目されているのは、「私たち」(I)から「私」が析出され「私たち」(II)へ移行している点である。「私たち」(I)は、合一的な集合性(E. Durkheim)からなる「閉じた共同性」として捉えられる一方、「私たち」(II)は、「分有」(J-L. Nancy)の可能性をもつ集合性からなる「開いた共同性」として捉えられるとしている。例えば、「想像の共同体」(B. Anderson)も可視化が困難な「共同性」からなるが、「分有」による「共同性」の範囲を可視化することはさらに困難であるという。その困難性を「想像の共同体」は、博物館や地図の機能の一部に預けることで可視化し「共同性」が保たれているとする一方、「分有」による「開いた共同性」は、「物語」に上記の機能の一部を担わせることによって、「共同性」が可能になっているとしている。このような議論から、それぞれの「物語」の個別性を前提としつつも、同時に「共同性」を形作ることを可能にするのが「(自己)物語」の機能であると論じている。そして、ある「物語」が記述され、それらが蓄積されることによって共有可能な「物語」が模索され、そのような共有可能な「物語」を基軸とした繋がりによる「共同性」が生成されるというのが、本論文の「物語」と「共同性」の論理的連関であることが示されている。そのようにして「私たち」が形成され、また新たな「物語」が積み重なり、共有可能な「物語」が更新され、そしてまたそれまでとは異なる「私たち」が形成され…という循環過程が「物語」と「共同性」をめぐる事態であることが指摘されている。このような循環過程を反復しながら「物語」が生成・蓄積される過程が「近代化」の一側面であると結論づけられている。

## 論文審査結果の要旨

矢崎氏が提出した博士学位申請論文は、主に「ことば」そして「ナラティヴ」とその構造および実践の分析を通して、現在当然のようにあるとされている「身の上」すなわち自己(物語)の成立および発展・維持過程を明らかにした社会学的研究である。そこで、審査にあたっては、著者の依拠している「ことば」「ナラティヴ」の研究ならではの視点や方法に焦点をあてながら、この論文のもつ独創的な成果を明らかにしていくと同時に、「ことば」「ナラティヴ」を対象とし、詳細な資料分析によるユニークなアプローチでどのようにしてより大きな社会的問いを解き明かそうとしたのかという点についても、その成果を明らかにしていく。

第一の成果は、ナラティヴの構造分析(本論文中では「構造的ナラティヴ分析」)を社会学的研究に用いて、その有効性を示してみせたことである。第二の成果は、誰もがあたりまえのように有していると考えられている「身の上」がある特定の時期に生まれたものであることを発見し、その過程を明らかにしたことである。第三の成果は、広範囲に渉猟した資料を細部にわたって読解し、ナラティヴというミクロなものとみられがちな対象の分析から、共同性と近代化の考察といったより根本的な社会的な問い解明の道筋の一つを示したことである。以下では審査で明らかになったそれぞれの成果について、より詳細に述べていく。

上の通り、第一の成果は、構造的ナラティヴ分析を社会学的研究に用いて、その有効性を示してみせたことである。この成果は当然のことながら第二、第三の成果と結びついているが、とりわけ社会学的研究では用いられることのほとんどない構造分析でそれらの成果をあげたことは特筆に値する。

ナラティヴ分析には主としてテーマ分析、構造分析、パフォーマンス分析などがあり、ここでいう構造的ナラティヴ分析とは、このうちの構造分析のことを指している。構造分析はとくにウィリアム・ラボフによる社会言語学的研究から始まるものとして知られており、ある特定のストーリーを組み立てるのに寄与するナラティヴの構造を、とくに節もしくは節のまとまりの機能に着目し、その機能にある特定の 카테고리(例



例えば「概要」「オリエンテーション」「評価」などを割り振る（名づける）ことで、ストーリー自体がどのような機能連関で成り立っているのかを解析する方法である。つけ加えると、特定の機能連関とストーリーが特定の社会的相互作用に結実するといった仮説でも知られている。そこで本論文は、ディスコース分析が拠って立つ構築主義的観点を基礎に、ストーリーの社会学と構造分析を組み合わせるという工夫をすることで構造分析を用いやすくし、とくに自己というストーリーがどのような構造で産出されるようになり、しかもそれが構造的に複雑化（本論文の言葉では「多層化」）していく中で、他のテキストをその構造内に送り込むことでテキスト間（自己物語間）を結びつける構造を発見した。この発見は非常に興味深く、高く評価できる。そしてそのさい、多くの先行研究、例えばガーゲンによる物語のパターンとストーリー内容の分類などを、「導入」「挿話」「結末」といった構造の帰結などとして読み直しながら、構造分析の有用性を示した。その結果、当初は知識や規範を述べるコミュニケーションの機会が、自己について語る機会へと移行し、その上でその自己（物語）が他の自己（物語）を構造内に取り込みながら（本論文の言葉では「接続」しながら）語られるようになるという歴史的経緯も明らかになった。これはとくに構造に着目することでなされた一つの達成であるといえる。またその一方で、本論文はナラティブの構造のみで当該現象を分析することでは不十分であることにも自覚的であり、言語編成という著者独自の方法的視座を用いることで、さまざまな自己物語において社会規範的要素への言及が重要な働きをしていることもまた併せて指摘しており、それが、本論文が方法論研究の一つの達成であることを示している。

第二の成果は、本論文のタイトルが示しているように、誰もがあたりまえのように有していると今日では考えられている「身の上」が、ある特定の時期に生まれたものであることを発見し、その過程を実証的に明らかにしたことである。つまり、自己についての記述と「物語」がひと組のセットとして利用されるようになる地点を明治時代に見出したことにある。

「身の上」は従来、何らかの社会状況や社会心理を説明するための資料として使用され、多くの著名な研究においてそれが人々にあることは所与の前提として扱われてきた。それに対して本論文は、「身の上」が何よりも語られるもの、すなわち自己物語であるということを起点に、語られる対象としての「身の上」がどのように析出され、またそれがどのように変化し成熟したのかということに注目し、その過程を明らかにした。これは従来の社会学的研究にはなかった極めて独創的な問いの設定であると同時に、それを資料の分析で実証的に解析したことは非常に重要な達成である。

とくに当時の資料の渉猟とその詳細な分析により、幾つかのナラティブ（〈情報的な語り〉〈規範的な語り〉〈物語的な語り〉）のパターンを同定し、それらが重なりながらも次第次第に〈物語的な語り〉すなわち「身の上」に移行していくこと、しかもその過程において集合的な「私たち」から個別的な「私」を記述する語りへと変化していったことを明らかにしたことは重要な成果である。

またそれを踏まえて、（投稿）日記や投書といった当時のマス・メディアに庶民がアクセスして産出したテキストを、「身の上」が成立した後の自己物語が発展し多重化したもの（〈単一構造的な語り〉から〈多層構造的な語り〉へ）であることを明らかにし、さらにはそのように多重化した「（多層構造的な）語り」が互いに「接続」することで自己物語として成熟していくという過程を、やはり資料から明らかにしたことは大きな成果である。

自己がさまざまな場で語られるものであり、それが何らかの断絶を契機として成り立つと同時に、その書き換えなどを通じて問題状況からの回復などがなされるというのは、現在のセルフヘルプグループ研究や「病の語り」研究における重要な知見であるが、それらを踏まえた上で、本論文が達成したこの成果は、そのような構築過程が歴史的にもみられることを実証的に明らかにしたと高く評価できる。

第三の成果は、広範囲に渉猟した資料を細部にわたって読解しつつ、ナラティブというミクロなものとみられがちな対象の分析から、共同性と近代化の考察というより根本的な社会学的な問題解明の道筋の一つを示したことである。

ディスコース分析やナラティブ分析は、ミクロな社会状況や社会的相互行為を分析するための方法と考えられがちであり、また多くの場合、そのような研究局面で活用されることが多い。それらをより根本的な社会学的問いに結びつけて論じるには、当該ディスコースやナラティブそれ自体が、そのような問いへの解答を可能にするような仕組みを伴っていることを分析的に発見しなくてはならない。つまり、それらディスコースやナラティブを研究者の側が用意する図式に当てはめて論じることは方法論的に避けなくてはならず、ディスコースやナラティブ自体がその仕組みを指し示していることを明らかにしなくてはならないのである。これはディスコース研究やナラティブ研究を通して社会学的問いに接近しようとする研究領域においては極めて重要な研究の指針であり、広く社会学という場でコミュニケーションを行うために必要な手続きでもある。

本論文はその点で、自己物語の挿話構造から「接続」という自己物語の展開と増殖の機序を明らかにし、それを通して自己（物語）同士が相互に結びつく仕組みを明らかにした。ジェローム・ブルーナーが指摘したように、物語化することは共通の背景をもとに人々に出来事を理解可能にする。人々が、明治時代のある時期に共通の認識枠組みとして特定の構造を持つ物語を利用し、またそれを相互に利用可能であるということが相互に確認可能であったということ自体が、そこに新しく立ち現れつつある現実を経験し共通のものとして理解可能にしたという議論は極めて興味深く、資料によって実証的に明らかにされた物語の経年的変化という観点からも、説得力を持っている。そしてそれらを踏まえて、マス・メディアの資料から近代化と共同性を読み取るときに陥りがちな、想像の共同体を範とするような議論ではなく、構造分析によって明らかにされた「接続」から、共同性そのもののある種の展開（開かれた共同性）を論じたことは大きな成果である。

しかしながら、ここで論じられている自己物語の多くが女性によるものであり、女性を中心とした「不幸の共同体」についての議論を介して、近代化と共同性一般を論じるのは、やはり力業であることは指摘しなければならない。男性誌も調査対象として渉猟したものの、女性と同様の「不幸の共同体」が発見できなかったことは審査過程で明らかになったが、であれば、制度や規範とコミュニケーション実践との循環的装置として機能する自己物語を、やはり同様の機能をもつ他の装置との比較において理解する方法が必要とされるだろう。また同時に、デュルケーム的な閉じた共同性からジャン＝リュック・ナンシー的な開かれた共同性へという形で、共同性を論じるのは図式的にすぎるところもあり、詳細な資料分析にふさわしい緻密な理論研究がより一層必要であることも確かである。

とはいえ、以上のような未達成の課題はあるものの、本論文が「身の上」すなわち自己物語をめぐってこれまでなかった独自の問いを設定してそれを解明し、その研究の過程で方法論的にもまた実証的にも特筆すべき成果をあげたという点で、博士論文としての水準を十分に満たしていることは言を待たない。

以上、本審査委員会は、本学位申請論文の内容と研究活動を慎重に審査し、2018年1月26日に行われた公開の最終審査口頭試問の結果をも加味して判断し、矢崎千華氏は博士（社会学）の学位を授与するのにふさわしいとの結論を得たので、ここに報告する。